成美堂出版の二十年

1969 1989

成美堂出版の二十年

平成元年一月　発行

編集
発行人　深見兵吉

発行所　成美堂出版

東京都文京区水道一―八―二
電話／東京03（814）4351
郵便番号／112

印刷所／大盛印刷K・K
装丁／日本デザインセンター
写真撮影／森沢志津雄
口絵指定／葦工房
制作／せせらぎ舎

成美堂出版の二十年
1969-1989

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

二十年をかえりみて……社長 深見兵吉……3
成美堂出版略年表……9
成美堂出版発行書一覧……41
歴年発行点数表……91
成美堂出版入・退社員、現社員一覧……92
あとがき……専務 深見悦司……94

二十年をかえりみて

社長　深見兵吉

本の世界にはいって六十年になる。成美堂出版を会社組織として始めてから二十年経った。

以前から、ながい経験を一冊の本にまとめたらどうかと勧めてくれる方もおられ、少しはそんな気にもなりかけたが、まだまだ現役で時間もない。葬式用ならあと二十年か三十年後だと思っているうちに成美堂出版の二十周年記念日を迎えることとなり、とりあえず過去の資料だけはまとめておかないと、ということになった。無味乾燥な中身になると思うが、直接仕事に関係された方がたにとって多少なりとも記念碑的なものになればと思いつつ作業にはいった次第である。

大正八年、村の小学校が移転新築された。私はこの学校に入学した。そして六年間の小学校での私の心をとらえたのは、新築の校舎に寄付されたオルガンであった。大型のオルガンには深見兵八氏寄贈と刻み込まれていた。父の弟で、都会で出版と楽器販売をし、書店の番頭としても勤務していた。このころの田舎の小学生にとって鮮烈な印象であったオルガンという超近代的なものを通して、想像もつかない「都会・文化・本・楽器……」というものが混然となって私の頭を一杯にした。

昭和二年に就職するとき、一も二もなく進路を書店の業界に向けてしまった。（蛇足だが昭和五十一年、母校百周年の記念式典にはグランドピアノを寄贈することができたし、百年史誌の刊行を委託され、出版人としてほぼ満足するものができたと思っている。人生の原点のひとつを確認したかったのかも知れない）

和歌山市宮井平安堂に入社し、その後取次店、出版社に勤務を続けてきたが、その間、本をつくるということの夢を見続けてきたのである。だから、書籍業界での人生の三分の一を自ら主宰する会社で本づくりに没頭できたのは望外の幸せと思う。これまで成美堂出版の発行した何千万冊もの書籍、スコアブックを取り扱い、販売し、購入していただいた取次、書店、運動具店、読者の方がたに深く感謝するとともに、この間私を支えてくれた社員の皆さん、成美堂出版の仕事を絶えず応援してくださった著者の先生がた、仕入先の方がたに心よりお礼申し上げる。出版社はこうした関係者の協力が得られなければなにもできないのだから。本当にありがたいと思っている。

成美堂出版のそもそもの成り立ちであるが、前にものべたように、それまで私は、フカミ書房とか、成美堂とか勝手な名前を付けて少しばかりの本をつくってもみた。もうけはともかく、ひとがつくっているのと同じような、いやもっと売れる本がつくれるはずだと思う一心であった。趣味である。そのなかに野球のスコアブックがあって、運動具店で少し売れるようになったのが基礎となった。

昭和四十四年一月、それまで義弟、田中正夫が経営していた成美堂を、神田に同

名の会社があった関係で成美堂出版株式会社として法人化し、私が正式に代表者になった。すでにスコアブックで経営の基盤はできつつあったが、それはあくまで運動具店むけであり、書店むけにはスポーツの入門書を若干発行していただけであった。当時の私は五十六歳、好不況の波はあったもののまだ日本経済は成長期にあり、出版業界もこの新参者を受け入れてくれる余地があったとみえて無事に漕ぎだすことができた。

現在の成美堂出版の出版物の根幹をなしているものに、「スポーツシリーズ」（A6判―文庫サイズ）、「物語と史蹟をたずねてシリーズ」（B6判）があるが、これはこの創業期に源がある。

当時一般のスポーツ図書は指導者のための上製本が中心であったが、スポーツを大衆のものに、また、中学生がポケットから出してルールを見られるようなものがあれば、と考え、東京大学の神田順治先生、東京教育大学（現筑波大学）の大石三四郎先生をはじめとする著者先生がたのご理解を得て現在の一〇〇点に余る文庫サイズの「スポーツシリーズ」がスタートしたのである。このあとスポーツ、レクリエーション関係図書は三〇〇点近く、また、うた・囲碁・将棋・スピーチなどの分野に文庫サイズの本を多数登場させることになった。

また成美堂出版のスタートまもなく始めたものに「旅のコーチシリーズ」がある。今でいう旅行ガイドである。『旅のコーチ信濃路』など二〇点以上を発行し、それなりに好評であった。しかし当時の成美堂出版には交通機関の時刻・運賃の改訂、道

路の新設についていくだけの機動力がなく、小人数の会社では無理と判断し、継続を断念することとなった。しかしこのとき『旅のコーチ信濃路』の著者八尋先生にお願いし、その年のＮＨＫ大河ドラマ「天と地と」の登場人物に関連して「信玄と謙信の旅」と名づけた付録をつけたことがヒントとなって「物語と史蹟をたずねてシリーズ」が誕生した。土橋治重先生には第一冊目の『平家物語』を依頼、その後二十冊近くの著作をお願いした。そして長期的な刊行物となって、書店へのアピールに役立つこととなった。

旧知堀野真一、羽津子夫妻提案のポケット版「うたの本」（一〇〇点近くを刊行）が今もって勢いをたもち、この関連でできた『結婚式のうた』が当時目新しく評判となって、次の企画スピーチ関係書の充実に寄与した。その後、現、壮光舎印刷㈱社長竹内一氏の助言による「囲碁シリーズ」（文庫サイズ）を発刊、これが大変好評であったため、将棋、麻雀シリーズに発展したのである。

成美堂出版の出版物は、私の考えついたものも少しはあるが、ほとんどはひとさまの提案、何気ない一言によるものである。よそで売れている出版物をそのまま真似るということはできるだけ避けてきた。人に喜ばれるもの、なるほどと思われるものを、人とのかかわりあいのなかでつくっていく、何のためにつくっているのかをわきまえる、出版が「こころざし」だということをときどき思い出しながらつくるということに心がけた。単にもうけるだけならもっと成長する業種はほかにいくらでもある。

昭和五十四年、越後堂の小林社長の勧め・斡旋でその前の年に行き詰まっていた光風社書店を買い取り、新会社、光風社出版㈱として営業を始めた。何の目的で、とよく聞かれるが、大佛次郎、山手樹一郎などの本を出したかったというのが本音ではなかろうか。書店に勤め始めたころ、大日本雄弁会講談社とか文芸春秋社とかが出す本はすばらしく、紀州の田舎者にとっては山の彼方の存在であった。出版事業を拡大し安定した経営策をとりたいということのほかにそういう気持ちがあったことは否定できない。だから紙型をもとに大作家の本を出せたときはうれしかったし、ある意味で人生の目的の一つを達成したような気持ちになった。

出版業は本当に金のかかるものだ。売れるか売れないかわからない在庫、いつお金になるのかわからない常備寄託在庫と売掛金。出版業は昔から有為転変、毀誉褒貶の象徴のようにいわれる業界だが、この仕事を長く続けるためには飽くことのない考える力、努力、辛抱とともに資金力が欠かせない条件である。少しぐらいのもうけはこの業界ではすぐにふっとんでしまう。「小さな会社」が二十年間も続けられることじたいが自慢にできるこの業界のように思う。これについて私は、経営の裏づけには不動産が不可欠と考えていた。苦労して購入した自宅を担保にして事業資金を借り、また少々無理をして事務所などを購入したが、これらの不動産を持っていなかったら、会社は今の規模の数分の一にとどまっていただろう。

経営の安定のためには雑誌が必要だといわれる。私にとって雑誌は経営的な意味

とともに文芸書と同様達成したい夢であった。正直言って毎月毎月、カラー写真で一杯の何万部という雑誌を発行することは夢であった。出版にたずさわる人間の単純な夢は雑誌と文芸書の発行と言っても過言ではない。もっとも華やかだ。自力では無理なので合弁方式で実現し、第一誌目の自動車雑誌『アウトクラフト』は失敗したが、次の外車情報誌『ウィズマン』は軌道にのることになった。また、A4判のカタログ誌に始まる、いわゆるムック版は昨年から二〇点の新刊発行を数えることになった。これもまた夢の実現である。

夢であった出版社の経営、文芸書の発行、雑誌・ムックの発行が小さいなりにスタートしたが、いま漸く緒についたばかりである。業界の状況は相変わらず厳しい。ちょっとした波ですぐ海底の藻屑となる程度の規模である。しかし夢を追うことをやめては出版人ではない。めんどうなことは若い諸君がやってくれるようになってきた。さらに夢追い業者になっていきたい。五年、十年先の夢を追って。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

成美堂出版略年表

昭和44年（1969）

中心的な出版物はスポーツ書、社長の〝スポーツを大衆に〟のモットーのもとに初心者向きの技術解説書に力を注ぐ。この年、「旅のコーチシリーズ」「ドライブの旅シリーズ」の発刊を決め、本年中に四点を刊行した。

1月7日　成美堂出版株式会社設立。代表取締役に深見兵吉就任。
1月8日　株式会社設立手続き完了。
2月10日　八尋先生と『旅のコーチ信濃路』の進行打ち合わせ。
4月14日　社員旅行、八名にて水上から三国峠へ。
8月8日　『日本秘境の旅』『旅のコーチ信濃路』出来、配本。新しいシリーズのスタート。
9月12日　教育大の大石先生、『サッカー上達法』脱稿。
9月17日　鶴書房来社、スポーツ店へのスポーツ書の売り込みについて協力依頼あり。
9月22日　『ドライブの旅関東・東海』出来。
10月2日　女子社員の入社テストを行う（応募二一名）。

昭和45年（1970）

四月、関口町一番地から関口一―三二―四の新社屋に移転、いままでの奥まった感じから表通りに出てきた感じ。だいぶ広くなる。

1・19　東京大学安田講堂に機動隊導入、占拠解除。
3・12　東京の積雪三〇センチ、全都交通麻痺。
4・21　ボストンマラソンで采谷義秋優勝。
5・10　国鉄運賃値上げ（初乗り三〇円）。
7・21　米アポロ一一号、人間を乗せ月面に着陸。
8・19　夏の甲子園高校野球で三沢高―松山商、二日二七回戦って松山商優勝。
11・4　三省堂渋谷店開店。

「旅のコーチシリーズ」「ドライブの旅シリーズ」の発行を積極的にすすめ、本年だけで八点を出す。「スポーツシリーズ」、スポーツ図書も急速に増える。

2月1日　「旅のコーチシリーズ」九州、奈良、京都の表紙決まる。
4月11日　社員旅行、日本平方面（日帰り）。
4月20日　関口一―三二―四の新社屋に移転。
9月25日　『旅のコーチ南紀』出来（一〇月三日発売）。
10月25日　社員旅行、猪苗代方面へ。

昭和46年（1971）

この年「物語と史蹟をたずねてシリーズ」の発行を決め、準備にかかる。NHK大河ドラマの放映にあわせ、土橋治重先生に『平家物語』を依頼。年末には見本出来る。スポーツ図書も充実。ボウリングが流行し、前年より図書二点を出す。

1月5日　「旅のコーチシリーズ」の定価三〇〇円に改訂。
1月7日　「早稲田ボウル」で新年会。
4月3日　『解説野球ルール』東販、日販に納品。
6月4日　『野球ルール辞典』（神田順治編）発売。
6月25日　東京出版協同組合へ失業・労災保険加入。
10月25日　大阪協同広告から『安全ドライブテクニック』の注文あり（一万部）。

1・5　藤原弘達著『創価学会を斬る』（日新報道刊）への出版妨害問題表面化。
3・31　日本赤軍、日航機「よど号」をハイジャック、乗客一〇一名。韓国へ。
11・25　三島由紀夫、切腹。

4・27　郵便料金値上げ（はがき一〇円、封書二〇円）。
5・14　横綱大鵬引退（在位五八場所、優勝三二回）。
6・17　沖縄返還協定調印。
6・18　㈲高田紙器工業所社長高田栄一氏逝去。

拝啓　新年を迎え、皆々様ますますご清栄のことと心からおよろこび申し上げます。弊店こと、昭和二十四年四月創業以来二十年の歳月を経、業績も順調に推移致しましたことは、ひとえに皆様のご支援の賜と深く感謝申し上げます。

このたび事業の発展に伴い、株式会社組織に改め「成美堂出版株式会社」として新たな一歩を踏み出すことに致しました。社長には、出版業界で三十余年の経験をもつ深見兵吉を迎え、私は取締役総務部長をつとめることになりました。

従来同様お引立のほどよろしくお願い申し上げます。

昭和四十四年一月

成美堂書店

田中正夫

拝啓　毎々格別の御引立にあずかり、ありがたく御礼申し上げます。

このたび、成美堂出版株式会社の発足にあたり、私どもは左記のとおり役員に就任いたしました。

と申しましても、従来の成美堂書店をそのまま引継いで営業致すわけで、いままでと何ら変りはありません。さらに、より充実した出版をめざしてがんばりたいと思います。

これまで同様お引立くださいますようお願い申し上げます。

昭和四十四年一月

成美堂出版株式会社

取締役社長　深見兵吉

取締役総務部長　田中正夫

取締役編集部長　笠原保雄

成美堂出版発足、あいさつ状

「旅のコーチ」、「ドライブの旅」シリーズ（A６判）

発足時の社屋のあったところ
（当時、関口町一番地）

次に移転した社屋（関口１－32－４）

11月1日　「中庭不動産」の二階を倉庫として借りる。
12月30日　『平家物語』見本出来。

昭和47年（1972）

「平家物語」好調。「物語と史蹟をたずねてシリーズ」の続刊を決める。本年中に三点を刊行した。スポーツも多様化の時代となり、

○この年、ボウリング人気。
○「講談社文庫」発刊、文庫合戦始まる。

テニス、ゴルフ、サーフィン、射撃、体操などの本を出す。一階の倉庫は手狭となり、大宮方面に用地をさがす。

1月9日　NHKの大河ドラマ「新・平家物語」放映はじまる。
1月11日　『平家物語』弘済会より注文あり。
1月19日　『平家物語』東販より注文あり。
2月7日　『平家物語』好評。
3月12日　全国の駅の売店に『平家物語』並ぶ。
4月22日　生沢朗『氷壁画集』を刊行。三省堂でサイン会を行なう（池袋店・新宿店）。
7月17日　男子社員募集。
10月20日　社員旅行、中仙道・木曽方面。
11月17日　『斎藤道三』好調。
12月18日　大宮の倉庫用地交渉。

昭和48年（1973）

「物語と史蹟をたずねてシリーズ」は引き続き好調、本年は六点を出す。スポーツ図書では武道関係を追加。音楽関係の本を出し始める。本年七点。印刷をオフセットに切り替える方針を決め、いままでの活版印刷の本は紙型から清刷り、オフセットに転換。この年オイルショックで用紙不足となる。

1月5日　椿山荘で新年会（一三名）。
2・3　冬季オリンピック、札幌で開幕。
2・21　ニクソン米大統領訪中。
2・28　「浅間山荘」連合赤軍事件、終日テレビで放映。
8・26　第二〇回オリンピック開幕（西独・ミュンヘン）。
9・1　日書連、特定出版社の不売ストを行う。
9・25　田中首相訪中。
10・28　パンダのカンカンとランラン、上野動物園に到着。
1・27　ベトナム和平協定調印。

1月8日　『斎藤道三』弘済会に納品、東販から注文あり。
1月11日　『夕刊フジ』に全ページ広告を出す。
1月23日　『斎藤道三』引き続き好調。
1月25日　『岐阜日日新聞』に全七段カラー広告を出す。
2月21日　『斎藤道三』弘済会より追加注文あり。
6月6日　山元印刷所の紙型を引き上げ、すべてオフセット印刷に切り替えることとなる。
10月19日　『咸臨丸出航』弘済会より受注。
10月26日　社員旅行、赤城山・鬼押し出し方面。
（10月）　はとバス座席券ナンバー付き受注。

昭和49年（1974）

前年より出し始めた音楽関係の本が好調のため、本年は一挙に一三点を出す。「物語と史蹟をたずねてシリーズ」、スポーツ図書とも積極的に刊行。オイルショックによる用紙不足はなんとか乗り切った。一応順調に入荷。前年より新聞の大型広告を出し始め、本年も続ける。

1月5日　『勝海舟』『咸臨丸出航』を弘済会に納品、好調。
1月25日　スポーツ新聞全社に三段二分の一広告を申し込む。
2月14日　『勝海舟』弘済会に納品。
2月16日　『坂本龍馬』出来。

3・　小松左京著『日本沈没』（光文社）発刊。一年後に四〇〇万部となる。
8・8　韓国民主化運動のリーダー金大中、東京のホテルから連れ去られる。
11・　石油危機による用紙不足で出版界混乱（翌年春まで続く）。

1・　民放各社、電力節約で深夜放送中止。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com